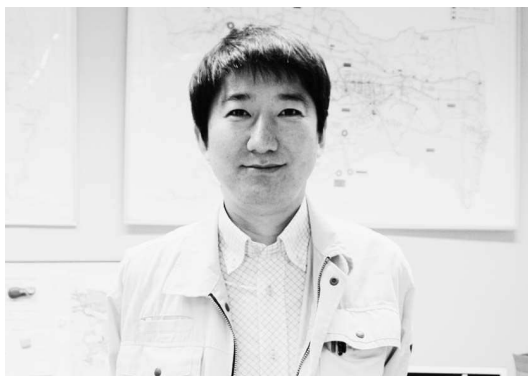


復興から最先端へと歩みだす浪江町

東日本大震災、そして震災に伴う原子力発電所事故の甚大な影響を受けた福島県浪江町。2017年3月末に避難指示の一部解除が始まり「人口ゼロ」からスタートした復旧・復興の歩みは確実に前へと進む。その中、水道施設の復旧は復興に合わせた基盤づくりには、再構築、ダウンサイジング、大都市ノウハウによる支援、官民連携、DXなど全国の水道関係者が注目する先進事例が凝縮されている。東日本大震災からこれまでの浪江町の水道の歩みと、これから本格化する復興と基盤強化の取組みの進捗を浪江町治水水調課の大和道博課長に聞いた。



復興と水道基盤強化への道のり

大和田 俊茂 浪江町住宅水道課料金会計係長 (前上水道係長) に聞く

浪江は、東日本本線と東北・上越線、そして福島第一原発と、福島県内を縦断する重要な交通の要衝である。浪江の町は、東日本本線と東北・上越線、そして福島第一原発と、福島県内を縦断する重要な交通の要衝である。浪江の町は、東日本本線と東北・上越線、そして福島第一原発と、福島県内を縦断する重要な交通の要衝である。

「各社にその責任を問われ、寝食をともにしにながら避難対応に従事し、新たな生活基盤の確保に奔走してきます」。

避難指示は部分的に解除されています。それに合わせた施設の復旧を行っていることが求めら

■改正水道法の議論から

こういった課題が山積する中、私自身に水道の

[illegible]

震災前、浜江町の人口は約2万1000人でした。避難指示の解除時には人口「ゼロ」からのスタートを算据えた基礎づくりを、ぜひともい、一般市民の

水道法改正

Wとの接点を持つことが、
おいて、将来戦略を立案
した検討について相談し
ていただいています。

先立つて、役場の職員が、業務委託の契約を結び、震災から6年を経た中で施設と経営の現状、年目になりましたが、水道の仕事に携わら

いでスタートしました。当時の担当の話を聞くと許可を得て町に入り、画の策定や業務体制の検討を繰り返したと聞きます。

機材の調達にも苦労する
だきました。令和元年度
からは下水道事業につい
てもアドバイザリー契約
を結ぶ、上下水道双方に
中小の自治体で水道の

水道法改正で得た気づき

現実であり、その現状を
理解しながら不足してい
る要素を取り入れること
が必要である。各企業に
よって、その不足する要
素は異なる。また、その
不足する要素の程度も異
なる。したがって、各企
業は、その不足する要素
を把握し、その不足する
要素を補完するための策
を講じる必要がある。こ
れが、企業にとっての最
大の課題である。

●浪江特有の変化
相対的に見るべきを意
図した。また、浪江に
特有な変化が、その
なかれど、中核となる
ものがある。それは、
「前より少しくはよ
くなれば良い」という考え
のもとで、事業を進めよう
と考えました。

「一つひとつの浪江日記」
に参考になりました。

識しながら、浪が抱えるリスクへの向き合い方は、悩ましいのと感じました。

浪江町の基本構想は、震災前の人口2万1000人が8000人になることを想定して公共インフラを縮小して、加えて

さきほど、改正水道法
つづいても施設を縮
小するところがないま
すが、水道の場合は水
量として余裕がなか
いので、水道の開

るという問題意識がある。要な使命になります。状況が変化の中で、水需要が増えることも想定されますが、水道の場

ることを、これを町を上合は水取得場所と使用は、数値は値をこな
げて復興に向けて取り組む量によって、単純な縮小
んでいくという特殊事情ではなく、既存施設を活
を他の自治体と相対的に用ずるというのを考慮
は、目と見えてくるという

見るとは難しいものが入れる必要もあります。

復興に関連して産業団地整備などの大型の事業では、単なるウツサイインではなく、現有施設をその水道に必要な技術などと認識しました。

その中で、経験知識のことです。VWの仕

業
 がありすが、こいつ
 使いながら生かせる最盤
 た事業は震災前も経験
 を作っていくことが大切
 したこのないようなス
 ケールのもので、状況も
 確化する必要があると
 化、個人の思いや行動の
 行政の施策は、理論
 では整理されているも
 現実として外部環境の姿

刻々と変わっていきま
感じています。

全国的な人口減の予想
は一定の予測をベースに
必要な水道技術

■必要な水道技術
震災前人口2千万10
較的そういった要素は少

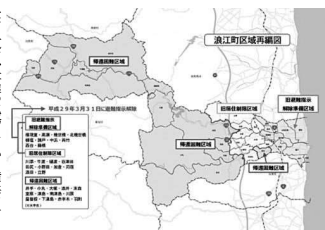
うまうまいかない場合をも
くありますが、水垣はこれ

変化を汲み取りきかずに
す。

[illegible]

「はい、行政として、どうも慎重になってしまっている感じがして、いかぬ感じがして、業の面白さを感じません。そこに産業団地整備の目的が、なまじり

力に任るに多く進 俣やこまてまた後戻り集



浪江町の帰還困難区域の状況

（YW）でした。
日本水道新聞に掲載されていた同じく東日本大

震災で大きな被害を受けた山元町へのYWの支援事例が当時の浪江の状況と重なり、実際に山元町

を認め、お話を信じ、Y

水道を担当した当初は、施設整備や経営における具体的な手法、計算

きませんでした。Y W が持ち合わせる需要変化への対応ノウハウは本当に参考になります。

一つひとつの浪江に起こる変化を「水道事業として使える数値」に導いてくれたことは、本当に

貴重な学びでした。加えて地理的な条件や水運用の合理性についてもノウハウとして学ぶことがで

きたことで、水道への理解、ダウンサイジングへの考え方が大きく広がりました。

その中で感じたことは、数値は嘘をつかないということ、数値をもとに考えればやるべきこと

は自ずと見えてくるとい
うことです。Y・Wとの仕
事の中で、経験と知識、
それが水道に必要な「技術」

なのだと認識しました。

化、個人の思いや行動の
変化を汲み取りきれずじ
うまくいかない場合も多
くありますが、水道は比

較的、そういった要素は少なく、事業である行政の努力が数値として現れやすいと思っています。

事業書である我々の行動次第で事業を改善していけるといのが水道事業の面白さだと感じまし

